様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　 ９ 月 １０ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｈ０１２７０

研究課題名（和文）日本語教師養成・研修におけるライティング教育実践能力の育成―批判的思考を中心に―

研究課題名（英文）Cultivating Practical Skills for Instructing Japanese Writing in Japanese Language Teacher Training and Development: From a Critical Thinking Perspective

研究代表者
鎌田　美千子（KAMADA, Michiko）

東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授

研究者番号：４０３７２３４６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　8,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、第二言語としての日本語のライティング指導の難しさに焦点を当てて現状を把握し、養成・研修に有効な教育内容と教育方法を明らかにすることを目的としたものである。定量的調査及び定性的調査を通して日本語教員養成課程の大学生、日本語教師、日本語教員養成課程担当教員それぞれが感じる難しさの状況を明らかにした上で、批判的思考を取り入れた養成・研修の両プログラムに関する試案を7つの内容（ビリーフ、パラフレーズ、ライティング課題、リソース活用、思考ツール、異文化性、専門日本語）にわたって作成し検証した。各授業の理解度及び満足度は全般的に高く、指導の難しさを軽減できたと言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究では、第二言語としての日本語のライティング指導に関する調査研究と実践研究を通して日本語教師のライティング教育実践能力の育成に向けた養成・研修の教育内容と教育方法を実証的に探究した。日本語教師の養成・研修について検討する上で必要となる基礎研究が不足している中で、指導側が感じる難しさを定量的及び定性的に解明し、それをもとにライティング指導に焦点を当てた養成プログラムと研修プログラムの具体化を図った点が本研究の特色である。日本語教師の養成・研修で扱うライティング指導について検討した研究は他に例がなく、先駆的な研究であると言える。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to develop pedagogical content and methods of Japanese language teacher education; particularly, Japanese writing as a second language. Through quantitative and qualitative surveys, we clarified the types of difficulties in instructing Japanese writing perceived by university students in Japanese language teacher training programs, Japanese language teachers, and the professors in charge of these programs. Then, based on survey results, we developed and verified each instructional plan for teaching Japanese writing to the university students and language teachers. We incorporated critical thinking and focused on seven content areas: beliefs, paraphrasing, writing tasks, resource use, thinking tools, interculturality, and Japanese for specific purposes. The results reveal high overall comprehension and satisfaction with each class, confirming a reduction in teaching difficulties. Our study offers important insights into Japanese language teacher education.

研究分野：日本語教育学

キーワード：日本語教員養成　日本語教師研修　教師教育　指導の難しさ　ライティング指導　書くことの指導　第二言語としての日本語　日本語教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究で取り上げる「書く」ことの指導、すなわちライティング指導は、他の「聞く」「読む」「話す」と同じく、日本語教育において欠かせない位置づけにある。だが一方で、現在のところ、日本語教員養成課程の授業では初級文型の指導を中心に展開される傾向にあり、特に「書く」に関しては、模擬授業、教育実習においてもほとんど扱われることがない。そのため、日本語教員養成課程で学べなかった日本語教師の中には、苦手意識を持つ者や、日本語を教え始めてから自ら手探りで学ぶ者が少なからず見受けられる。日本語教員養成課程の学習項目としてあまり浸透していない状況には、さまざまな要因があると考えられるが、仮にライティング指導に対して難しさが生じているとすれば、日本語教員養成課程の大学生、日本語教師、日本語教員養成課程の担当教員の三者の現状を捉え、改善に向けた取り組みが必要である。第二言語としてのライティングでは、内容・構成といった文章能力と文法・表現といった言語能力の双方が関係すること（Cumming 1989、坪根・田中 2015 他）をはじめ、長い文章を書く際の動機づけや、目的・読み手に応じた書き方の違い、さらに論理的な文章の書き方など留意すべき点は数多くあり、ライティング指導について学べる環境を整えることは重要である。

第二言語としての日本語のライティング教育研究に視点を移すと、これまで主に文章産出過程の分析や学習者の困難点の解明、教育方法の開発、文章の評価基準・観点の検討、専門分野別文章の分析がなされてきた。その一方で、指導側である日本語教師や日本語教員養成課程の大学生を対象に調査した研究は進んでおらず、日本語教師の養成・研修におけるライティング指導の検討に必要となる基礎研究、特に日本語教員養成課程の大学生や日本語教師の現状を捉えた研究が不足していた。中でも指導側がライティング指導に感じている難しさについては見落とされてきたと言える。

このような中で、日本語教員養成課程の大学生、日本語教師、日本語教員養成課程の担当教員がそれぞれ感じる難しさを把握し、その結果を日本語教師の養成・研修に反映できれば、教育実践能力の育成に向けた一助になると考えた。本研究では、特に批判的思考、すなわち「証拠に基づく論理的で偏りのない思考」（楠見 2016、p.2）、「自分の思考過程を意識的に吟味する、省察的（reflective）で熟慮的な思考」（同、p.2）、「より良い思考を行うために目標や文脈に応じて実行される、目標指向的な思考」（同、p.2）に着眼した。楠見（2016）によると、批判的思考のプロセスには、①情報を明確化する、②推論をするための土台を検討する、③推論をする、④意思決定や問題解決をする、といった四つの段階がある。一連のプロセスは、文章を書く上での基盤となるのみならず、日本語教師といった専門職を担う上でも有用であることから、養成・研修の試案に組み入れて検討することとした。

２．研究の目的

本研究は、日本語の教師教育に資する基礎研究として、第二言語としての日本語のライティング指導の難しさに焦点を当てて現状を把握し、養成・研修に有効な教育内容と教育方法を明らかにすることを目的としたものである。日本語教員養成課程の大学生、日本語教師、日本語教員養成課程の担当教員それぞれがライティング指導に感じる難しさの状況を定量的及び定性的に明らかにした上で、その調査結果をふまえ、批判的思考を取り入れた養成プログラム及び研修プログラムの試案を作成し、その有効性を検証することを目指した。

３．研究の方法

以下に示す(1)～(3)の方法で研究を行った。

(1)調査研究及び実践研究に向けた予備的な検討
- ①日本語教員養成課程のシラバス情報から見た現状の把握
- ②市販の教師用参考書から見た現状の把握
- ③海外の先行事例の把握

(2)ライティング指導に感じる難しさに関する調査研究
- ①日本語教員養成課程の大学生を対象にした調査
  - a.定性的分析
  - b.定量的分析
- ②日本語教師を対象にした調査
  - a.定量的分析
  - b.定性的分析
- ③大学の日本語教員養成課程の担当教員を対象にした調査

(3)ライティング教育実践能力の育成に向けた養成プログラム及び研修プログラムの試案の検証

４．研究成果

(1)調査研究及び実践研究に向けた予備的な検討

①日本語教員養成課程のシラバス情報から見た現状の把握

文化審議会国語分科会（2019）による「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版」の「必須の教育内容」に対応済みの大学のうちインターネット上にシラバスを公開している 106 大学・大学院のシラバス情報（2020 年 8 月現在）を分析資料として、ライティング指導（書くことの指導）が日本語教員養成課程の授業科目で扱われているかどうかを調べた。その結果、106 機関中 50 機関で扱われていたものの、半数に満たないことが把握された。

②市販の教師用参考書から見た現状の把握

市販の教師用参考書を調べた結果、ライティング指導を取り上げている教師用参考書は、初級・中級の指導を扱ったものが主流であり、中上級・上級の指導を詳しく扱ったものは、極めて少なかった。日本語教員養成課程でライティング指導について学ぶ機会がなく、さらに研修の機会がなければ、市販の教師用参考書の役割が大きいと言えるが、現状では、中上級・上級の指導に関する情報が得にくい状況にあることが把握された。この結果を踏まえて、本研究で検討する日本語レベルを中上級・上級とした。

③海外の先行事例の把握

海外の先行研究の把握に加えて、第二言語教育に関する教師用参考書に関しても調べた。その中で、批判的思考を重視した教師養成の先行事例であるドイツ語教師用指導書『Deutsch Lehren Lernen』（Ernst Klett Sprachen GmbH）の既刊 12 巻の中からライティング指導に関する箇所を翻訳し、養成プログラム及び研修プログラムの試案を作成する際に参考にした。

(2)ライティング指導に感じる難しさに関する調査研究

①日本語教員養成課程の大学生を対象にした調査

a.定性的分析

まず、日本語教員養成課程の大学生を対象にしたインタビュー調査を 2020 年 12 月～2021 年 1 月に実施した。調査協力者は、異なる大学の 4 年生 3 名で、全員が日本語教育実習を終えている。PAC 分析の結果、3 名に共通して語られた難しさは、評価、添削・フィードバック、テーマ選択、作文における漢字使用に関するものであった。調査協力者からは共通して、日本語教員養成課程での学びの他に、大学での外国語学習から専門科目、卒業論文に至るまでの自身の学習経験が語られた。実際に指導者として教育実践を行うには個々の学生の学習経験のみでは判断材料が限られることから、日本語教員養成課程では、学生自身が自らの学習経験を相対化して考えるための知識と多様な教育実践例を知る機会の提供が重要であることが示唆された。

次に、日本語教員養成課程の大学生のライティングの学習状況と困難点に関するインタビュー調査を 2021 年 1 月～2 月に実施した。調査協力者は、日本語教員養成課程の大学 4 年生 5 名で、全員が日本語教育実習及び卒業論文の執筆を終えている。結果は、次の通りである。他者と自分の意見の書き分け、事実・根拠の提示などの論理的な文章作成に必要となる項目は、卒業論文作成前にも様々な授業で学んでいると思われるが、卒業論文を通して学んだと認識されていることが把握された。また、文章構成では、アウトラインの作り方、各パラグラフの書き方、各章のつなげ方、文章表現では、簡潔な文の書き方、読みやすい表現、表現の重複の回避、引用では、間接引用・直接引用の使い分け、他者の意見と自分の意見の書き分け、間接引用における適切な言い換え・要約に難しさを感じていることがわかった。卒業論文執筆がアカデミック・ライティングで求められる多くのスキルの習得や気づきにつながっている様子から、一つのテーマについて長さのある文章を書くプロセスを体験することが重要であることが示唆された。

b.定量的分析

日本語教員養成課程の大学生を対象にした質問紙調査を、複数の大学の日本語教員養成課程の担当教員から協力を得て、2021 年 7 月～11 月に Web 上で実施した。調査協力者 74 名のうち事前質問で「日本語教育実習の経験がない」と回答した 9 名を除く 65 名分の回答を分析した。調査ではライティング指導に関わる 40 項目について 5 件法で尋ねた。分析にあたっては、後述する調査(2)②a のライティング指導経験 5 年未満の日本語教師の回答と比較した。結果は、次の通りである。大学生は、文章構成、言語表現、添削、学習活動、評価、書くことに対する抵抗感の軽減、学習者の自発性・主体性の育成について 5 年未満の教師より有意に「難しい」と感じていた。また、大学生と 5 年未満の教師に共通する難しさは、授業外にかかる時間（授業準備・添削）、複眼的思考であった。批判的思考に関しては、「難しい」という結果は得られず、両群の比較において有意な差は見られなかった。本研究により、大学生と 5 年未満の教師との間に差異がある項目と、逆に差異がない項目を把握できたことから、養成プログラムを立案・実施する際に着眼すべき点を見いだすことができ、養成における教育内容及び教育方法を具体的に検討することが可能となった。

②日本語教師を対象にした調査研究

a.定量的分析

日本語教師を対象にした質問紙調査を 2021 年 5 月～6 月に Web 上で実施した。調査では、上記(2)①b に前述した、日本語教員養成課程の大学生を対象にした質問紙調査の質問項目と同じ 40 項目を用いて 5 件法で尋ねた。調査協力者 172 名のうち事前質問で「国内の大学で留学生に 1 年以上教えている」といった条件を満たさなかった 5 名を除く計 167 名分の回答を分析した。

分析にあたっては、ライティング指導経験 5 年未満、5 年以上 10 年未満、10 年以上の 3 群に分けて比較した。結果は、次の通りである。1）ライティング指導全般に関しては指導経験 5 年未満の教師のほうが 10 年以上の教師より有意に難しいと感じていること、2）ライティング指導経験年数による違いがある項目は難しさの平均値が概ね高くないこと、3）5 年未満、5 年以上 10 年未満、10 年以上のそれぞれの段階で難しいと感じている上位項目には共通して、授業外にかかる時間（授業準備・添削）、複眼的思考、論理的思考が含まれていることがわかった。これらの結果から、5 年未満の教師に教育支援が必要であること、指導経験年数によらず「難しい」と感じている項目には継続的な教育支援が必要であることが示唆された。批判的思考については、「難しい」という結果は総じて得られず、ライティング指導経験年数による有意な差は見られなかった。本研究により、日本語教師のライティング指導経験年数による難しさに差異がある項目と、逆に差異がない項目を把握できたことから、研修プログラムを立案・実施する際に着眼すべき点を見いだすことができ、研修における教育内容及び教育方法を具体的に検討することが可能となった。

b.定性的分析

日本語教師を対象にしたインタビュー調査を 2021 年 10 月～11 月に実施した。上記(2)②a の調査協力者の中から、ビリーフ、パラフレーズ、ライティング課題、リソース活用、思考ツール、異文化性、専門日本語の 7 つのテーマに関してそれぞれ 5 名、計 35 名に調査協力を依頼し、半構造化インタビューを行った。結果を総合すると、ライティング指導の難しさは、文章を書くプロセスとその指導の多面性及び多様性にあり、授業で指導しても実際に学習者が書く文章に反映されていかないという状況に難しさを感じていることが把握された。こうした特性を考慮して研修プログラムを構成するとともに、第二言語によるライティング過程や習得過程の諸側面を踏まえた様々な指導例を知る場を設ける必要があることが示唆された。

③大学の日本語教員養成課程の担当教員を対象にした調査

大学の日本語教員養成課程の担当教員を対象にしたインタビュー調査を 2022 年 9 月に実施した。調査協力者は 7 名で、全員が日本語教員養成課程のコーディネーターの経験がある。調査では、担当教員がライティング指導を扱うことにどのような難しさを感じているのかを調べ、日本語教員養成課程でライティング指導が扱われるようになるために何が必要なのかを考察した。分析にあたっては、佐藤（2008）の質的データ分析法によりコーディングを行い、カテゴリーとサブカテゴリ―を生成した。結果は、次の通りである。日本語教員養成課程でライティング指導を扱うことの難しさに関して【養成課程の指導】、【「書く」指導】、【カリキュラム編成】、【受講学生】、【担当教員】というカテゴリーが抽出された。具体的には、【養成課程の指導】の［養成課程の内容の選別］と［求められる内容との不一致］、【「書く」指導】の［「書く」指導の内容の選別］、［指導のあり方の不明確さ］、［指導自体の難しさ］、【カリキュラム編成】の［時間確保］と［優先度の低さ］、【受講学生】の［受講学生の資質・能力］と［受講目的の多様性］、【担当教員】の［担当教員の知識］に難しさを感じていることが判明した。調査協力者の語りでは、日本語教員養成課程で扱うライティング指導の内容が定められていないこと、学生の受講目的及び資質・能力が多様であること、初級指導に偏る教育実習への対応でライティング指導について取り上げる時間が確保できないことなどが難しさの背景にあることが述べられ、日本語教員養成課程でライティング指導が扱われるようになるには、これらの点を考慮しながら現状の改善を図っていく必要があることが示唆された。

(3)ライティング教育実践能力の育成に向けた養成プログラム及び研修プログラムの試案の検証

上述した一連の調査で明らかになったライティング指導の難しさを踏まえて養成プログラムと研修プログラムの試案を作成し、研究メンバー各々の専門領域から批判的思考を組み込んだ実践研究に取り組むとともに、その有効性を検証した。以下、検証の概要を養成プログラム、研修プログラムの順に述べる。

養成プログラム試案に関しては、2023 年 5 月～7 月に A 大学文学部日本語教員養成課程の選択必修科目（1・2 年次対象）において 7 回にわたって検証した。実施にあたっては、A 大学の研究倫理審査委員会の承認と受講者から研究協力への同意を得て、研究メンバーが一人ずつ順にゲストスピーカーとして実践する形で行った。各回の内容は、「日本語教師のビリーフとライティング」、「ライティングと書きことば」、「ライティング課題の目的と特徴」、「ライティングにおける情報の活用」、「意見文作成のための思考ツール」、「ライティングにおける文化の影響」、「専門分野で求められるライティング」である。各回は、先述した調査研究で明らかになった難しさの項目を踏まえながら、1)導入：本授業の目標を把握する、2)活動：ペアまたはグループワーク 1、3)講義：本授業の学習内容 1、4)活動：ペアまたはグループワーク 2、5)講義：本授業の学習内容 2……6)まとめ：本授業全体を振り返る、といった流れで進めた。一部の授業は、「批判的思考のプロセス」（楠見 2016）を参考に構成した。授業後に行ったアンケート（5 件法、一部は自由記述）における各授業の理解度（平均値 4.69、標準偏差 0.53）及び満足度（平均値 4.82、標準偏差 0.39）は総じて高く、授業中の受講者の状況からもライティング指導の難しさを概ね軽減できたと言える。他方、少数ではあるが、論理的な思考を要する内容が難しい学生や、自身のライティングへの内省にとどまり学習者への指導自体にまで思考が及ばなかった学生がごく一部に見受けられた。こうした個々の学生に応じた指導については、さらに検討が必要である。

研修プログラム試案に関しては、主にライティング指導経験 5 年未満の日本語教師を対象に参加希望者を募り、2023 年 2 月（京都府）、8 月（大阪府、東京都）、9 月（宮城県）に 7 回にわたって検証した。各回の内容は、「ビリーフ研究とライティング教育に関するビリーフ」「ライティング教育とパラフレーズ」「引用指導のためのライティング課題の設計」「アカデミック・ライティングにおける適切なリソース活用の指導」「思考ツールを利用した意見文のアウトライン作成の指導」「ライティングに見られる学習者の異文化性」「文章の構成と論理展開に着目した専門日本語ライティング教育」といった内容である。各回は、研究メンバーが一人ずつ順に担当し、先述した調査研究で明らかになった難しさの項目を踏まえながら、養成プログラムと同じ上記 1)～6)の流れで進めた。一部のセミナーは、「批判的思考のプロセス」（楠見 2016）を参考に構成した。セミナー後に行ったアンケート（5 件法、一部は自由記述）における各セミナーの理解度（平均値 4.43、標準偏差 0.57）及び満足度（平均値 4.78、標準偏差 0.58）は総じて高く、セミナー中の受講者の状況からもライティング指導の難しさを概ね軽減できたと言える。また、自身の教育実践を伝え合う場、他教員の教育実践を知る場が全体的に有効であることがわかった。

上述した二つの検証から、ライティング教育実践能力の育成に向けて次のような教育環境、教育方法、リソースが有用であることが示唆された。まず、養成段階での教育環境としては、留学生のチューターなどを通して学習者の文章を実際に知る経験ができる環境、自らのビリーフを知り他者との相違を理解できる環境が挙げられる。教育方法としては、講義・グループワーク・全体共有を有機的に結び付けた授業構成、ライティング及びライティング指導への気づきを促す教室活動、学習者の文章の指導や添削でなぜそのように指導するかを相互に説明し合うグループワークが挙げられる。リソースとしては、学習者作文コーパス、誤用例集、日本語教科書、日本語教育語彙表などが挙げられる。また、大学生自身のライティング能力に対しては、これまでの学習経験をもとに文体や文章構成、論理展開、適切な情報活用への意識化を図るとともに自身の文章にこれらの知識を活かすライティング経験が不可欠であることが示唆された。

次に、研修段階での教育環境としては、ライティング指導で抱えている問題やその指導の成功例と失敗例について教員同士で話し合える環境、他機関の教員との意見交換や情報共有を通してライティング指導に関する自身の思考を省察的に深めることができる環境、学習者の文章に内在する異文化の特徴を指導の観点に活かすことができる環境が挙げられる。教育方法としては、各自が抱えている問題の解決の糸口を見いだすために従来の指導方法や日本語教科書を批判的に捉え直す視点の提示、学習者が文章を書くプロセスの中で生じている問題（文章構成、論理展開、表現の適否など）について各自の教育実践を報告し合うグループワークが挙げられる。リソースとしては、養成段階とほぼ同じく、学習者作文コーパス、誤用例集、日本語教科書などが挙げられる。また、日本語教師の多くは、大学でのレポートや卒業論文などの執筆経験を有し、指導に必要なライティング能力を備えているものの、各自が経験したライティング課題や引用のタイプには個人差があることに留意しておく必要があることが示唆された。

(4)まとめと今後の展望

本研究では、第二言語としての日本語のライティング指導に関する調査研究と実践研究を通して日本語教師のライティング教育実践能力の育成に向けた養成・研修の教育内容と教育方法を実証的に探究した。日本語教師の養成・研修について検討する上で必要となる基礎研究が不足している中で、本研究は、指導側が感じる難しさを定量的及び定性的に解明し、それをもとにライティング指導に焦点を当てた養成プログラムと研修プログラムの具体化を図った。日本語教師の養成・研修で扱うライティング指導について検討した研究は他に例がなく、本研究では、ライティング指導に苦手意識を持つ日本語教師及び日本語教員養成課程の大学生に対する教育の方向性の一端を示すことができた。今後は、さらにライティングと他技能を連携させた「聞いたことを書く」「読んだことを書く」「話したことを書く」のような技能統合型の指導についても研究を進めていく予定である。

引用文献

楠見孝（2016）「市民のための批判的思考力と市民リテラシーの育成」楠見孝・道田泰司編『批判的思考と市民リテラシー―教育，メディア，社会を変える 21 世紀型スキル―』第 1 章，pp.2-19，誠信書房

佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法―原理・方法・実践―』新曜社

坪根由香里・田中真理（2015）「第二言語としての日本語小論文評価における「いい内容」「いい構成」を探る―評価観の共通点・相違点から―」『社会言語科学』18（1），pp.111-127.

文化審議会国語分科会（2019）「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告）改定版」，https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/kokugo/kokugo_70/pdf/r1414272_04.pdf

Cumming, Alister (1989). Writing expertise and second-language proficiency, *Language Learning*, 39(1), 81-141.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　11件）

１．著者名 鎌田美千子・坪根由香里・副田恵理子・脇田里子・村岡貴子	４．巻 24
２．論文標題 日本語教員がライティング指導に感じる難しさ―指導経験年数に着目して―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 専門日本語教育研究	６．最初と最後の頁 75-82
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鎌田美千子	４．巻 35
２．論文標題 日本語教授法開発と教師養成―ライティングにおける書きことばの習得と学習を例に―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 文化交流研究	６．最初と最後の頁 87-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 鎌田美千子・坪根由香里・副田恵理子・脇田里子	４．巻 14
２．論文標題 日本語教員養成課程の大学生が感じるライティング指導の難しさ―ライティング指導5年未満の日本語教師との比較を通して―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル	６．最初と最後の頁 9-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 坪根由香里・鎌田美千子	４．巻 22
２．論文標題 大学の日本語教員養成課程で学ぶ大学生がライティング指導に感じる難しさ―PAC分析の結果をもとに―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 大阪観光大学研究論集	６．最初と最後の頁 33-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 副田恵理子	4．巻 60
2．論文標題 アカデミック・ライティング・スキルの学習状況と困難点―日本語教員を目指す学生のライティング指導力レディネス調査として―	5．発行年 2023年
3．雑誌名 藤女子大学文学部紀要	6．最初と最後の頁 127-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鎌田美千子	4．巻 30(1)
2．論文標題 日本語教員養成課程で学ぶ「書きことばの指導」に関する授業開発	5．発行年 2023年
3．雑誌名 日本語教育方法研究会誌	6．最初と最後の頁 34-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.19022/jlem.30.1_34	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鎌田美千子・副田恵理子	4．巻 21
2．論文標題 日本語教員養成課程で扱われる書くことの指導の現状と課題―担当教員が感じる難しさに焦点を当てて―	5．発行年 2024年
3．雑誌名 大学日本語教員養成課程研究協議会論集	6．最初と最後の頁 17-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 坪根由香里	4．巻 24
2．論文標題 日本語教育のライティング指導に関するビリーフ	5．発行年 2024年
3．雑誌名 大阪観光大学研究論集	6．最初と最後の頁 33-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 脇田里子	4．巻 27
2．論文標題 日本語ライティング教育における論理的思考支援のための教員研修	5．発行年 2024年
3．雑誌名 ヨーロッパ日本語教育	6．最初と最後の頁 540-546
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 菅谷奈津恵	4．巻 10
2．論文標題 大学院留学生によるレポートの事例分析―文章構成と引用を中心に―	5．発行年 2024年
3．雑誌名 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要	6．最初と最後の頁 89-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 副田恵理子	4．巻 61
2．論文標題 留学生対象の日本語ライティング教育における情報リテラシーの指導	5．発行年 2024年
3．雑誌名 藤女子大学文学部紀要	6．最初と最後の頁 27-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計13件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 鎌田美千子・坪根由香里・副田恵理子・脇田里子・村岡貴子・菅谷奈津恵・松岡洋子
2．発表標題 大学で日本語を教える教師が抱えるライティング指導の難しさ―日本語教師養成・研修の具体的検討に向けて―
3．学会等名 2021年度日本語教育学会秋季大会
4．発表年 2021年

１．発表者名 坪根由香里・鎌田美千子
２．発表標題 大学の日本語教員養成課程で学ぶ大学生が持つライティング指導に対する意識―難しさに焦点を当てて―
３．学会等名 第30回小出記念日本語教育研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 副田恵理子
２．発表標題 大学生のアカデミックライティングスキルの学習状況と困難点
３．学会等名 第28回大学教育研究フォーラム
４．発表年 2022年

１．発表者名 脇田里子
２．発表標題 日本語教育のライティング指導における思考ツールの利用
３．学会等名 第28回大学教育研究フォーラム
４．発表年 2022年

１．発表者名 松岡洋子
２．発表標題 ライティング指導に見られる異文化性―教師研修の視点からの考察―
３．学会等名 2022年度異文化間教育学会第43回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 鎌田美千子
２．発表標題 第二言語としての日本語の書き言葉に関する指導の現状と課題―日本語教員対象のインタビュー調査をもとに―
３．学会等名 第29回大学教育研究フォーラム
４．発表年 2023年

１．発表者名 副田恵理子
２．発表標題 留学生対象の日本語ライティング教育における情報リテラシーの指導―情報収集からその情報を文章内に取り込む引用まで―
３．学会等名 第29回大学教育研究フォーラム
４．発表年 2023年

１．発表者名 鎌田美千子
２．発表標題 日本語教員養成課程で学ぶ「書きことばの指導」に関する授業開発
３．学会等名 第61回日本語教育方法研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 副田恵理子・鎌田美千子
２．発表標題 日本語教員養成課程でライティング指導を扱うことの難しさと課題―教員を対象としたインタビューをもとに―
３．学会等名 第32回小出記念日本語教育学会年次大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 坪根由香里
２．発表標題 日本語のライティング指導に関する日本語教師の意識
３．学会等名 PAC分析学会第17回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 脇田里子
２．発表標題 日本語ライティング教育における論理的思考支援のための教員研修
３．学会等名 第26回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 鎌田美千子・副田恵理子
２．発表標題 日本語教員養成課程で学ぶ「ライティング指導」の可能性と課題
３．学会等名 第30回大学教育研究フォーラム
４．発表年 2024年

１．発表者名 布施悠子
２．発表標題 ライティング指導不安尺度開発の試み
３．学会等名 2020年度日本語教育学会秋季大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

1．著者名 大学日本語教員養成課程研究協議会（編）	4．発行年 2022年
2．出版社 ココ出版	5．総ページ数 297
3．書名 社会を築くことばの教育―日本語教員養成のこれまでの30年、これからの30年―（第Ⅱ部第2章「日本語教員養成課程の教育と学部学生の現状」（鎌田美千子）、第Ⅱ部第6章「日本語教員養成の教育方法・教材」（副田恵理子））	

〔産業財産権〕

〔その他〕

＜雑誌論文・学会発表・図書に当たらない研究発表＞
鎌田美千子（2020）「日本語教授法開発と教師養成」，東京大学大学院人文社会系研究科・文学部第58回文化交流茶話会
鎌田美千子（2022）「言語教育の観点から見たパラフレーズの諸相」，第14回東京大学文学部日本語教育研究会
鎌田美千子（2023）「日本語教師養成における「書くこと」の指導を考える」，第20回日本語教師教育者ネットワーク
鎌田美千子編（2024）『日本語教師養成・研修におけるライティング教育実践能力の育成―批判的思考を中心に―』令和2年度～令和5年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書，全140頁

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	坪根　由香里 (Tsubone Yukari) (80327733)	大阪観光大学・観光学部・教授 (34434)	
研究分担者	副田　恵理子 (Soeda Eriko) (90433416)	藤女子大学・文学部・教授 (30105)	
研究分担者	脇田　里子 (Wakita Riko) (20251978)	同志社大学・グローバル・コミュニケーション学部・教授 (34310)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	村岡　貴子 (Muraoka Takako) (30243744)	大阪大学・国際教育交流センター・教授 (14401)	
研究分担者	松岡　洋子 (Matsuoka Yoko) (60344628)	岩手大学・国際教育センター・教授 (11201)	
研究分担者	菅谷　奈津恵 (Sugaya Natsue) (90434456)	東北大学・高度教養教育・学生支援機構・教授 (11301)	
研究分担者	布施　悠子 (Fuse Yuko) (70782598)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・日本語教育研究領域・プロジェクト非常勤研究員 (62618)	令和2年度まで

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関